

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369 E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp
http://w01.tp1.jp/~ja6694550
発行者 堀江有里 (題字 松橋 順)

宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

(牧師として) 「地域に学ぶ」とは何か？

[後編]

堀江有里牧師に聞く



堀江牧師就任式(7月9日)にて

前号(なか伝道所学習会 / 四月二三日)で京都での体験を語ってくださった堀江有里牧師。本号では、なか伝道所や寿地区との関わりを中心にお話していただきます。

○寿地区「訪問」

この四月から、寿地区の活動にも顔を出させていただいています。そのひとつは炊き出しです。午後は教会の仕事を重なるので朝の食材切込みに少し顔を出す程度です。そこでも多くの出会いのなかから、居場所を与えてもらっています。

私が寿に初めて訪れたのは一九九一年の年末、大学四回生のときでした。越冬闘争への「訪問」です。そのときは、牧師の先輩から、神奈川教区

寿地区センターに三

森妃佐子さんという牧師がいらっしゃる

から、その人に会いに行けばいいと言われるて来たのです。越冬闘争会場のプレハブ

の扉をガラガラと開けて、「三森さんはいらっしゃいますか？」と訪ねて行ったことを覚えていています。いま

思えば、大変ご多忙なときにずいぶん迷惑な話です。キリスト

教関係では同じようなルートで寿を訪れる人たちがいる。それ

に対応されている三森さんは本当に大変だと思えます。

寿地区を案内していただいたとき、まち

の端を流れる中村川の向こう側、吉浜町の交差点をもう少し行ったところから、山の上に見覚えがある建物が目に飛び込んで来ました。私の出身校である横浜共立学園の、当時「新校舎」と呼ばれていた建物です。夜だったので、街の明かりに照らされ

ボーッと浮き上がって見えました。中学・高校時代、「川のあっち側に行つてはいけない。石川町駅は南口から降り降りしなさい」と指導されてきました。京都・東九条

と同じく、川の向こう側がこちら側になる瞬間でした。私は自分がどこに立つのか、一九九一年の年末からずっと問われ続けて

いるような気がします。その宿題をやるために、寿地区で牧師をやりなさいって言われたのかな、とも思っています。

○キリスト者として、牧師として、

地域と関わるということ

一九九五年一月十七日に発生した兵庫県南部大地震に直面して、当時、日本基督教団兵庫教区総会議長だった北里秀郎(きたざと・しゅうろう)牧師は「地域の復興なくして、教会の復興なし」という言葉を残されました。教会は、遠くから礼拝のために人びとが通っているケースが多い。そうした事情もあって、災害が起きたとき、自分たちの礼拝堂をまず再建することから始めたという人たちがいるかと思えます。これは大教会に限った話ではないでしょう。

地域と教会の壁は厚いと思えばしばしば指摘されることがあります。私のように、被災しなかった者がこの言葉を引用するのはおこがましいかもしれませんが、北里牧師の言葉は、現代日本のキリスト者の考え方を問うものでもあったと感じました。教会の牧師になって、この言葉をあらためて重く受け止めています。

また、日本基督教団という教派のあゆみは、自分がそのメンバーである以上、自分の足許にある問題です。その責任の一端を担っている。その意味で、私は「日本基督教団」という漢字表記にこだわってきませんでした。それは、戦争責任をはじめ、この名称で実際にたくさん大きな問題を作りだしてきた歴史を心に刻みたいという想いからです。

太平洋戦争時には皇民化教育の急先鋒を担い、また沖縄の諸教会を切り捨ててきた歴史がある。沖縄では独自の教会形成がされ、一九六九年に沖縄キリスト教団と日本基督教団は「合同」しました。しかし、沖縄の諸教会が不在のうちにつくられた信仰告白や教団成立の沿革なども見直すことなく、対等な「合同」ではなかった。そのような歴史をもって歩んでいる私たちの現実を考えると、名称変更すらできていない痛みを想起し続ける必要があると、私は考えているのです。

キリスト者として、牧師として、地域とのかかわりを考えること。また、自分たちの所属している日本基督教団のあゆみにつ

いて歴史を踏まえること。こうした問題意識は、私が牧師になろうと決意した頃、京都・東九条で先輩たちから教わったことでもあります。

○「地域で学ぶ」とは何か？

せっかく寿に来たのだから教会に閉じこもることなく地域と出会っていききたい。そんな想いを伝えたら、「まちの様子は昔とは違うよ」とこたえて下さった方がいました。たしかにまちの様子がだいぶ変わった。たしかにまちの様子がだいぶ変わったことは一歩足を踏み入れればわかります。かつての寄せ場、労働者のまちから、高齢化が進み福祉のまちへの変化はしばしば指摘されてきました。

大阪・釜ヶ崎の地域に関わり続けてきた地理学者の原口剛さんはこう述べています。

「労働者のまちから福祉のまちへ」という語り口が定番化してきた時期、これと歩調を合わせるかのように、貧困をめぐる言説からは「階級」や「闘争」といった敵対性を孕んだ言葉が急速に衰え、「格差」や「包摂」といった言葉が主流となりつつあった。(原口剛『叫びの都市―寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』洛北出版、二〇一六年)

このことは、他の差別問題にも言えることではないでしょうか。「闘う」、「抵抗す

る」という言葉から、「包摂」へ。つまり人々を社会に、共同体に、含み込んでいくという言葉に変わっていく意味は何でしょうか？

十分に「食えない」生活を余儀なくされている人々がとりあえず食事をとれるようになり、部屋のなかで暮らしたいと思う人々に屋根のある場所があることはきつと良いことでしょう。そのほうが身体への負担も少ない。でも、「包摂」は本当に、ただ良いことだけなのでしょいか？ 多くの場合、実際には、マイノリティ（少数者）がマジョリティ（多数者）の考え方に含まれまるといふことではない。しかも、マジョリティの価値観は何も変わらないまま、です。そして、食事もあり家もあり「日本人」である自分は、マジョリティの恩恵を受けている。だからこそ、現状から問われるのです。

私は訪問者であり続けることの意味を、この寿のまちで考え続けたいと思っています。寿の居住者ではないことを。きつとこれから、寿地区で、なか伝道所で、いろんな人たちと出会っていきと思えます。でも自分が見てきた風景を忘却してはいけない気がしているのです。これまで自分に問われてきたことが、今後も問われていくことを忘れずにおきたいのです。そしてそのことが、地域で学ぶこと、そして「地域から学ぶ」とは何かについて考え続けることだと、いまは思っています。

(まとめ 幸前 元)

風景

毎年六月下旬には、障がいのある方たちの訓練会キャンプに参加させていただいている。会場にある体育館は優しくやわらかで、温かい雰囲気包まれる。この雰囲気年に一度包まれたくて、ど素人であり役には立たないわたしは今年も参加させていただいた。ここに集うトレーニー（訓練を受ける人）は肢体不自由の方、知的障がいの方（ダウン症や自閉症など）だ。そして日々、この方の生活を支えておられるご両親の存在が大きい。大切なわが子のために労苦を惜しまない。またトレーニーにかわるためにトレーナー（訓練を行う者）も集う。これから三者の紡ぎ出すハーモニーが目的に向かつて奏でられる。今いるところよりも少しでも高みを目指し、個々の方のペースで歩むその過程（生の営み）が尊い。

「訓練」というとどこか厳しいイメージを伴うが、この訓練は徹底してトレーニーに寄りそう。個々の目的に向かつてトレーニーとトレーナーが共に協力して歩んでいく。それを見守るご家族のまなざしが温かい。二度と繰り返すことのできない「今」という時を大切に生きる姿勢が温かい迫力をもつて迫ってくる。この空間で同じ時を共有すると自分の生き方を厳しく問われることにもなる。トレーニーの方たちと、ご家族の方から、いつも大きな宝物をいただく。

一泊二日のキャンプが終わったとき、わたしの体内から力が抜けていく。そして心地よい疲れに覆われ、食事中にも関わらずわたしは眠りについた。

(宮崎祥司)

使信

みは

「見張り」はできるのか？

堀江有里

人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めに背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。権威者は、あなたの善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。

(ローマの信徒への手紙

一三章一〜四節)

■権威と支配

パウロがローマの教会へあてた手紙のなかで語られている、このテクストは、多くの場面で「利用」されてきました。さまざまな解釈があります。が、やはりここではこの世の権力が神によって立てられたとする説をパウロが熱心に語っているものとしてとらえるべきでしょう。ここに描かれる「権威」は、実質的な力をともなう「権力」と訳したほうが適切ではないでしょうか。力をもつ人びとによって正当化された暴力をともなう「権力」です。

抽象化せず、わたしたちの置かれた

えーとねえ

美宇 「ドッチボールでね

あたっちゃったけど・・・」

美宇 「相手に」あてて、またもどれたよ・・・」

(嬉しそうに話す) 郭美宇 五歳

現実と向き合っていないものではないのか。それは国家権力を補完する教会のあり方を正当化するために、このテクストが引用されてきた現実と向き合うことでもあります。

■国家の暴走と教会の役割

たとえば、教会は、国家が暴走しはじめたときに、どのように向き合うことができるのか。この問いは、わたしたちが所属する日本基督教団でも長年議論されてきました。

今年、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(一九六七年三月二六日)が、当時、鈴木正久教団総会議長名で公表されたから五〇年。日本基督教団の成立経緯や戦争協力を踏まえ、自らの足跡を問う文書であり、ひとつの大切な契機がつくられたものだ、わたしも認識しています。しかし、限界があるのも事実です。沖縄の諸教会について触れていないという点もそのひとつ

でしょう。

また、わたしが尊敬している牧師のひとり谷村徳幸さんは、かつて講演のなかで「戦責告白」のつぎの文をとりあげています。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をな

いがしるにいたしました。

国家の暴走に対し、教会は「見張り」の役割を果たすことができなかつたという反省が示されているように読めます。しかし、わたしたちは「見張り」の役割を担うことができるのか。谷村さんは「祖国が罪を犯したとき、教会もまたその罪におちいる」ことが、じつは必然だと認識する必要があります。あるのではないかと問いました。そこには国家と教会の類似性・同質性があるからです。谷村さんの仮説は七点です。①国家も教会も概念であり、理念であること、②権力(暴力)・権威をもつこと、③強制的儀礼を行うこと、④象徴を置くこと、⑤排除をともなう「異端審問」「思想統制」「聖餐式」、⑥忠誠を求める「信仰告白」||「自白」、⑦法規制を恣意的に運用すること、です。

(谷村徳幸)「差別構造を再/生産するキ

リスト教の構造を見つめる——国家と教会・退治か対峙か」日本基督教同京都教区性差別問題特設委員会『聖書はおもしろい』第七巻「聖書を読み直す会記録集二〇一二年六月—二〇一三年二月、二〇一三年」

ただ、「このような教会の実態をしつかりと見つめることしかできない」。谷村さんの指摘は教会が抱いてしまいがちな自負の前に立ち止まる可能性を示しているように思えるのです。

■「わたし」という主体性

日本の教会の戦争責任を考えると、はずしてはならないひとつに天皇制の問題があります。聖書学者の荒井献さんは、天皇が公的には「わたし」と主語をもって語れない点を指摘しています。そこには「無責任体制としての天皇制」がある、と。そのなかで戦争責任をわたしたち、キリスト者はどのようにとらえるのか。「直接的責任」だけではなく、為政者を甘受してきた

世代の責任もある。そのときに留意すべき点を荒井さん述べています。

自分の立場を、神の名や聖書の言葉によって正当化してはならない（…）それをしたら、自分の立場に対する責任を、神や聖書に転嫁することになる。自分の責任は自分であること、これが無責任性としての天皇制の縄目から脱出できる、ほかならぬイエスがその振舞いを通して示唆した、唯一の方法であるように、私には思える。

（荒井献「無責任性の象徴としての天皇制」『強さ』の時代に抗して』岩波書店、二〇〇五年、一八八頁）。

荒井さんによると、イエスは体制批判するときに一度も神の名や聖書の言葉によって自らの言行を正当化せず、むしろ、そうすることを拒否さえしている、と（同上、一八九頁）。

歴史をふまえたうえで、わたしたちはいくつもの出来事をへいま・ここへ、どのように検証していけるのか。また、積み重ねられてきた課題をどのように継承していけるのか。つねにそこにあるのは誰かとの共同作業の可能性です。だからこそ、神につくられた「わたし」という存在から出発し、自分の足下を問いつづけたいものです。

まど

▼教会のSさんが長年、ことぶき学童保育にかかわっていらつしやるという情報をキャッチ。折をみて見学に寄せていただきたいと思っていたところ好機到来。初めて足を踏み入れた寿生活館三階の学童保育は壮大な洞窟のような、迷路のような…。みんなの宝物がたくさん詰まった場所でした。▼突然、小学校一年生の子がこんな声をかけてくれました。「ドッジボール、やろ」。え？どこで？

このおぼはんが？——問い直すより先にわたしはかれの後を追って隣室にしつらえられたドッジボールのコートに立っていました。久々に動き回って流した汗は気持ちよかったです。▼Sさんが子どもたちと一緒に遊ぶおやつづくりにも邪魔しました。この日のメニューはクリームシチュー。「ねえ、なにじん？ぼくは中国人で、名前は〇〇といます」。あらためてとても丁寧なご挨拶をいただきながら、子どもたちの背景に思いを馳

せます。かれらも慣れない場できつと居場所を見つけてきたのだろうな、だからたとえ相手が見知らぬ大人（おぼはん）であっても居場所をつくってくれたのだな、と。勝手な解釈にすぎないのですが…。

▼七月九日に無事に就任式を終えました。初めてのことでとても不安でしたが、司式を原宝さん（上大岡教会牧師、神奈川県教会地区活動委員）に、奏楽を急遽、北村恵子さん（西東京・新泉教会）にお願いし、信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）にも協力してもらいました。ありがとうございました。また、遠くは滋賀や名古屋から八六名の方々がご出席くださいました。祝電やお花、果物（奄美古仁屋のパッションフルーツ）などをお送りくださった方々、準備段階より伴走してくれた他教会の先輩や友人たち、迷走するあらたな牧師を支えてくださる教会の方々にも心より感謝申し上げます。（堀江有里）

【支援献金】

支援献金（五月分）

支援献金（六月分）

感謝してご報告いたします。

編集後記

編集の力不足であまり伝わっていないと思うが、堀江牧師は難しい話題も独特の間合いで楽しくお話される。著作で拝見するあの密度の高い流麗な文体とのギャップが、すごく不思議で魅力的な方です。（元）